

The evaluation of the sum over arithmetic  
progressions for the coefficients of the  
Rankin-Selberg series

名古屋大学・多元数理科学研究科  
市原 由美子 (Yumiko Ichihara)

§1 Introduction

$SL_2(\mathbb{Z})$  に関する重さ  $k$  の正規化された Hecke eigen cusp  
form  $f(z) = \sum_{n=1}^{\infty} a_n e^{2\pi i n z}$  ( $a_n \in \mathbb{R}$ ) に対して, Rankin [6] は

$$\sum_{n \leq x} a_n^2 = \alpha x^k + O(x^{k-\frac{2}{5}}) \quad (1)$$

を与えた。ここで  $\alpha$  は Petersson 内積  $(f, f)$  の定数倍である。

また、 $SL_2(\mathbb{Z})$  に関する重さ  $l$  の正規化された Hecke eigen cusp

form  $g(z) = \sum_{n=1}^{\infty} b_n e^{2\pi i n z}$  ( $b_n \in \mathbb{R}$ ) と、primitive は mod  $d$  の

Dirichlet 指標  $\chi$  について

$$\sum_{n \leq x} a_n b_n \chi(n) \ll x^{\frac{3}{5}} d^{\frac{4}{5} + \epsilon} \quad (2)$$

も命じる。(著者 [3] 参照)

これらの結果は Rankin-Selberg  $L$ -関数と呼ばれる  $L$ -関  
数を調べることにより、得られたものである。ここでは、

Rankin-Selberg  $L$ -関数を次のように定義する。

$$L_{f \otimes g}(s, \chi) = L(2s, \chi^2) \sum_{n=1}^{\infty} \frac{a_n b_n \chi(n)}{n^{s + \frac{k+l}{2}} - 1}, \quad \text{Re}(s) > 1$$

ここで  $\chi$  は mod  $d$  の Dirichlet 指標、 $L$  は Dirichlet  $L$ -関数  
とする。

Rankin-Selberg  $L$ -関数は  $s$ -平面全体に解析接続され、  
 $f=g$  の  $d=1$  の時は  $s=1$  に極点をもち他は正則とな、  
 213。また、 $\text{Re}(s) > 1$  には Euler 積表示も持、213。  
 22、 $L_{f \otimes g}(s, \chi)$  は次のようにも書ける。

$$L_{f \otimes g}(s, \chi) = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{C_n \chi(n)}{n^s}$$

$$C_n = n^{1-\frac{k+l}{2}} \sum_{m^2|n} a_{\frac{n}{m^2}} b_{\frac{n}{m^2}} m^{k+l-2}$$

よ、2、 $C_n$  は  $n$  の情報から cusp form の Fourier 係数の  
 情報を導ける。例えは、 $C_n$  の Riesz mean ( $\chi$  は primitive と可)

$$D_p(x) = \Gamma(p+1)^{-1} \sum_{n \leq x} C_n \chi(n) (x-n)^p, \quad (p \in \mathbb{R})$$

を考えると、Hafner [2] の理論より  $D_p(x)$  は Voronoi-formula と  
 与えられ、それを調べることは  $f=g, d=1$  の時

$$\sum_{n \leq x} C_n = \frac{\pi^2}{6} k \alpha x + O(x^{\frac{3}{5}}) \quad (3)$$

や、 $f \neq g$  又は  $d \neq 1$  の時

$$\sum_{n \leq x} C_n \chi(n) \ll x^{\frac{3}{5}} d^{\frac{4}{5} + \varepsilon} \quad (4)$$

が成り立つ。これらより (1), (2) の本質とな、213。(k, \alpha は  
 $L_{f \otimes g}(s)$  の  $s=1$  における留数である)

$L_{f \otimes g}(s, \chi)$  は  $\chi$  が primitive の時は関数等式を持ち解析的に  
 扱える。今後、様々なことを調べられる期待が出来る。

今回は、次の和について調べた結果を紹介する。

$$\sum_{\substack{n \leq x \\ n \equiv a \pmod{p}}} C_n$$

ここで、 $p$  は素数で  $(a, p) = 1$  とする。  $r \geq 1$  は自然数。

この和を調べる前に、まず  $C_n$  について命ずる、213 ことと述べる。まず Deligne による  $a_n, b_n$  の評価から  $C_n$  は  $C_n \ll n^\varepsilon$  となる。また更に、 $\sum_{x^\varepsilon < y \leq x} |C_n| \ll y$ ,  $(x^\varepsilon < y \leq x)$  も Ivic-Matsumoto-Tanigawa [4] や著者 [3] により得られる。

実は  $p \geq x^{\frac{1}{4}}$  という条件のもとでは  $\sum_{\substack{n \leq x \\ n \equiv a \pmod{p}}} C_n \ll x^{\frac{3}{5} + \varepsilon} p^{\frac{3}{5}}$  は可なり、 $(\sum_{0 \leq n \leq x} |C_n| \ll x)$  を利用し、 $p \leq x^{\frac{1}{4}}$  に関しては次の積分表示

$$\sum_{n \leq x} C_n \chi(n) = \frac{1}{2\pi i} \int_{t+\varepsilon-iT}^{t+\varepsilon+iT} \frac{x^s}{s} L_{f \circ g}(s, \chi) ds + O(x^{t+\varepsilon} T^{-1} + x^\varepsilon)$$

をもとに、 $\varphi$  は Euler 関数、 $\chi_0$  は mod  $p$  の principal character と

$$\begin{aligned} \sum_{\substack{n \leq x \\ n \equiv a \pmod{p}}} C_n &= \frac{1}{\varphi(p)} \sum_{n \leq x} C_n \chi_0(n) \\ &+ \frac{1}{\varphi(p)} \sum_{\substack{\chi \pmod{p} \\ \chi \neq \chi_0}} \frac{1}{2\pi i} \int_{t+\varepsilon-iT}^{t+\varepsilon+iT} \frac{x^s}{s} L_{f \circ g}(s, \chi) ds \\ &+ O(x^{t+\varepsilon} T^{-1} + x^\varepsilon) \end{aligned} \quad (5)$$

を調べることに

$$\begin{aligned} \sum_{\substack{n \leq x \\ n \equiv a \pmod{p}}} C_n &= \delta_{f,g} \frac{1}{\varphi(p)} \frac{\pi^2}{6} k \alpha (1 - \alpha_p^2 p^{-k}) (1 - \bar{\alpha}_p^2 p^{-k}) (1 - p^{-1})^2 x \\ &+ O(x^{\frac{3}{5} + \varepsilon} p^{\frac{3}{5}}) \end{aligned} \quad (6)$$

を得ることにできる。ここで  $\delta_{f,g} = \begin{cases} 1 & f=g \\ 0 & f \neq g \end{cases}$  であり、

$\alpha_p$  は  $L_{f \circ g}(s, \chi)$  の Euler 積表示に現れる  $f$  と  $p$  に依る数で、

$\alpha_p + \bar{\alpha}_p = a_p$ ,  $|\alpha_p| = p^{\frac{k-1}{2}}$  を満たす複素数である。

(5) から (6) を得る方法は、ここには詳しく述べないが、

reflection principle と呼ばれる方法で、

$$L_{\text{flog}}(s, X) = \sum_{n=1}^{\infty} \exp\left(-\left(\frac{n}{Y}\right)^2\right) \frac{C_n X^{(n)}}{n^2} \\ - \frac{1}{2\pi i} \int_{\substack{u=-\delta-\varepsilon \\ |w| \leq \frac{T_0}{2}}} F(s, w) L_{\text{flog}}(1-s-w, \bar{X}) \frac{dw}{w} \\ + O(\exp(-CT_0))$$

$$F(s, w) = C_X Y^w \left(\frac{2\pi}{p}\right)^{-2+q(s+w)} \frac{\Gamma(1+\frac{w}{2}) \Gamma(1+\frac{k-l}{2}-s-w) \Gamma(\frac{k+l}{2}-s-w)}{\Gamma(s+w+\frac{k-l}{2}) \Gamma(s+w+\frac{k+l}{2}-1)}$$

( $s = \sigma + it$ ,  $w = u + iv$ ,  $C$ : 定数  $> 0$ ,  $C_X$ : (7) 参照.)

を用いて

$$\frac{1}{\text{cecp}} \sum_{\substack{\chi \bmod p \\ \chi \neq \chi_0}} \frac{1}{2\pi i} \int_{\frac{1}{2} + it_0}^{\frac{1}{2} + 2it_0} \frac{x^s}{s} L_{\text{flog}}(s, X) ds$$

を評価し、一部で指標の和に  $\|2$  Cauchy-Schwarz の不等式

を用いて mean value の理論を用いることで得られる。

(詳しくは著者 [3] 参照)

さて、(6) は  $p \leq x^{\frac{1}{2}}$  とより強い条件と mean value の部分で導ける結果である。  $L^p(L, D_p(x))$  の Voronoi-formula と

$L_{\text{flog}}(s, X)$  の関数等式 (=2"  $k > l$  とする)

$$\Phi_{\text{flog}}(s, X) := \left(\frac{2\pi}{d}\right)^{-2s} \Gamma(s - \frac{k-l}{2}) \Gamma(s + \frac{k+l}{2} - 1) L_{\text{flog}}(s, X)$$

$$\Phi_{\text{flog}}(s, X) = C_X \Phi_{\text{flog}}(1-s, \bar{X}) \quad (7)$$

に現れる  $C_X$  の具体的な形を利用することで、より弱い条件、

$p^2 \leq x^3$  のもとでより詳しい結果を導くことができた。

## Theorem

$p$  は奇素数と可る。  $(a, p) = 1$  に対する 2 次多項式  $C_n$  なる。 ( $r \in \mathbb{N}$ )

$$(i) \quad p^{3r} \geq x^2 \text{ の時} \quad \sum_{\substack{n \leq x \\ n \equiv a \pmod{p^r}}} C_n = O(x^{\frac{3}{5}} p^{\frac{3}{5}r})$$

$$(ii) \quad p^{3r} \leq x^2 \text{ の時}$$

$$\begin{aligned} \sum_{\substack{n \leq x \\ n \equiv a \pmod{p^r}}} C_n &= \frac{\delta + \beta}{c(p^r)} \frac{\pi^2}{6} k \alpha (1 - \alpha_p^2 p^{-k}) (1 - \bar{\alpha}_p^2 p^{-k}) (1 - p^{-1})^2 x \\ &\quad + \frac{1}{c(p^r)} \sum_{\substack{\chi \pmod{p^r} \\ \chi \neq \chi_0}} \chi(a^{-1}) L_{\delta + \beta}(0, \tilde{\chi}) \\ &\quad + O(x^{\frac{3}{5}} p^{\frac{3}{5}r} + x^{-\epsilon} p^{\frac{3}{2}r + 4\epsilon}) \end{aligned}$$

$\tilde{\chi}$  は  $\chi$  の導  $\chi$  の primitive character. また,  $k=l$ ,  $\tilde{\chi} \neq \chi_0$ .

$a \neq 0$  の時,  $L_{\delta + \beta}(0, \tilde{\chi}) = 0$  に注意.

この Theorem は  $p$  が奇素数の時  $C_x$  の平均値の  $k$  乗で書くことにより得られることは注目して結果である。よって  $p=2$  の時は (6) より詳しい結果は得られない。

## § 2 Proof of Theorem

証明のポイントは § 1 の最後に書いたように  $C_x$  の具体的な形である。Li [5] によれば、2 次多項式  $C_n$  なる。

Fact  $p \geq 2$  は素数と可る。  $r \geq 1$  は自然数として、

$\pmod{p^r}$  の primitive character  $\chi$  と可る。

この時、 $\chi$  が non-real character ならば、

$C_x = W(x)^4/p^{2r}$  であり、real character であり、  
 は  $C_x = 1$  である。  $\sum W(x)$  は Gauss 和。

この事実から、次の Lemma が導ける。

Lemma

$p$  は奇素数とする。  $b$  は  $(b, p) = 1$  なる整数とする。  
 この時  $\sum'_{x \bmod p^h} C_x \chi(b^{-1}) \ll \varphi(p) p^{-\frac{h}{2}}$  が成り立つ。

これは  $C_x$  が Gauss 和の 4 乗で書ける時、指標和ととる  
 ことにより hyper Kloosterman 和が現れ、Deligne や Weinsten  
 の non-trivial な hyper Kloosterman 和の評価 (Deligne [1],  
 Weinsten [7]) を用いることで Lemma の証明ができる。  
 この Lemma が Theorem の証明の key となる。

次に  $D_p(x)$  の Voronoi-formula を考える。 Voronoi-formula  
 の収束性を加味し、 $p=2$  の時を扱う。(次の Voronoi-formula は  
 $p > \frac{3}{2}$  において絶対収束している)

$$\frac{1}{\Gamma(p+1)} \sum_{n \leq x} C_n \chi(n) (x-n)^p = Q_p(x) + \sum_{n=1}^{\infty} \frac{C_x C_n \bar{\chi}(n) \left(\frac{2\pi}{d}\right)}{\left(n \frac{16\pi^4}{d^4}\right)^{p+1}} f_p\left(\frac{16\pi^4 x n}{d^4}\right)$$

ここで  $Q_p(x)$ ,  $f_p(x)$  の定義を述べる。  $p-2$  は偶数のとき、  
 省略できるが、どちらも良い性質を持つ具体的な関数である。

この両辺に  $\chi(a^{-1})$  をかけ、 $\sum'_{x \bmod p^h, x \neq x_0}$  とすると Lemma の  
 評価が効いて、差分作用素を用いて  $D_2(x)$  から  $D_0(x)$  の情報

ととり出すと  $p^3 \leq x^2$  となる。

$$\sum_{\substack{n \leq x \\ n \equiv a \pmod{p}} C_n = \frac{1}{\varphi(p)} \sum_{n \leq x} C_n \chi_0(n) + \frac{1}{\varphi(p)} \sum_{\substack{\chi \pmod{p} \\ \chi \neq \chi_0}} \chi(a^{-1}) L_{f \circ g}(0, \chi) + O\left(x^{\frac{3}{5}} p^{\frac{3}{5}} + x^{-\varepsilon} p^{\frac{3}{2} + 4\varepsilon}\right) \quad (8)$$

が得られる。同様の方法で

$$\sum_{\substack{n \leq x \\ n \equiv a \pmod{p^r}}} C_n - \frac{1}{p} \sum_{\substack{n \leq x \\ n \equiv a \pmod{p^{r-1}}} C_n = \frac{1}{\varphi(p^r)} \sum_{\substack{\chi \pmod{p^r} \\ \chi \neq \chi_0}} \chi(a^{-1}) L_{f \circ g}(0, \tilde{\chi}) + O\left(x^{\frac{3}{5}} p^{\frac{3}{5}r} + x^{-\varepsilon} p^{\frac{3}{2}r + 4\varepsilon}\right) \quad (9)$$

が得られる。

(8), (9) より帰納法で次に示す。

### Proposition 1

$p$  は奇素数 とし、  $p^{3r} \leq x^2$ ,  $r \in \mathbb{N}$  の時

$$\sum_{\substack{n \leq x \\ n \equiv a \pmod{p^r}}} C_n = \frac{1}{\varphi(p^r)} \sum_{n \leq x} C_n \chi_0(n) + \frac{1}{\varphi(p^r)} \sum_{\substack{\chi \pmod{p^r} \\ \chi \neq \chi_0}} \chi(a^{-1}) L_{f \circ g}(0, \tilde{\chi}) + O\left(x^{\frac{3}{5}} p^{\frac{3}{5}r} + x^{-\varepsilon} p^{\frac{3}{2}r + 4\varepsilon}\right)$$

が成り立つ。

更に同様の方法で次に示す。

### Proposition 2

$$\sum_{n \leq x} C_n \chi_0(n) = \delta_{f,g} \frac{\pi^2}{6} k \alpha (1 - \alpha_p^2 p^{-k}) (1 - \bar{\alpha}_p^2 p^{-k}) (1 - p^{-1})^2 x + O\left(x^{\frac{3}{5}} p^{\frac{4}{5}}\right)$$

が成り立つ。ここで  $\chi_0$  は  $\pmod{p}$  ( $\geq 2$  なる素数) の principal character.

この 2 つの Proposition から Theorem 11 を証明できる。

### § 3 Remark

また、Theorem 2 (6) のように  $C_n$  の和に ついて 2 通りの方法を紹介した。1 つは Voronoi-formula を利用する方法であり、1 つは reflection principle と呼ばれる方法である。実は reflection principle を用いると次を示せる。

$$\sum_{n \leq x} C_n \chi_0(n) = d_{f,g} \frac{\pi^2}{6} k d (1 - \alpha_p^2 p^{-k}) (1 - \bar{\alpha}_p^2 p^{-k}) (1 - p^{-1})^2 x + O(x^{\frac{3}{5} + \varepsilon} p^\varepsilon) \quad (10)$$

これは error 項にある  $p$  については Proposition 4 よりよいものがある。しかし、 $x$  中の  $a \in p^k$  とした場合、実際、Theorem 2 導く上では  $\varphi(p)^{-1} \sum_{n \leq x} C_n \chi_0(n)$  を導くのに Proposition 2 の  $p^{\frac{4}{5}}$  という評価の問題がある。これは (10) よりも Proposition 2 を採用した。

また reflection principle 2 (4) を考えれば

$$\sum_{n \leq x} C_n \chi(n) \ll x^{\frac{3}{5} + \varepsilon} p^{\frac{4}{5}}$$

( $\chi$  は mod  $d$  の primitive character )

が導ける。



## References

- [1] P. Deligne, Cohomologie Etale (SGA4 $\frac{1}{2}$ ), Springer Lecture Notes 569 (1977).
- [2] J. L. Hafner, On the representation of the summatory functions of a class of arithmetical functions, Lec. Notes in Math. 899 (1981) 148-165.
- [3] Y. Ichihara, The evaluation of the sum over arithmetic progressions for the coefficients of the Rankin-Selberg series, and II, preprints.
- [4] A. Ivić, K. Matsumoto and Y. Tanigawa, On Riesz mean for the coefficients of Rankin-Selberg series, Math. Proc. Cam. Phil. Soc. 127 (1999) 117-131.
- [5] W. Li, L-Series of Rankin-type and their functional equations, Math Ann. 244 (1979) 135-166.
- [6] R. A. Rankin, Contributions to the theory of Ramanujan's function  $\tau(n)$  and similar arithmetic functions I and II, Proc. Cam. Phil. Soc. 35 (1939) 351-356.
- [7] L. Weinstein, The hyper-Kloosterman sum, Enseignement Math. (2) 27 (1981) 29-40.